

2018 西日本豪雨により被災した油彩画作品の修復報告

大原秀行、影山千夏

1. はじめに

2018年、「平成30年7月豪雨」（以後、一般的に使われる西日本豪雨と記す）により被害を受けた油彩画作品の修復についての報告である。2018年7月7日未明、西日本付近に停滞した活発な梅雨前線は、集中的に大量の雨を降らせ、岡山県内の風水害としては「戦後最悪の大惨事」となった。岡山県では10河川18箇所河川が決壊¹⁾。中でも倉敷市真備町を流れる小田川及びその支流が決壊、越水したことによって、多くの家屋が床上浸水し、同地域全体が甚大な被害を受けた。

この豪雨により多くの文化財も被災した。その中から、倉敷市の要請により油彩画3点の修復を吉備国際大学文化財総合研究センターにて行なうこととなった。この3点はいずれも岡山ゆかりの画家片岡銀蔵²⁾ (1896-1964) によるもので、倉敷市が所有し、倉敷市真備支所、倉敷市立真備図書館、コンサートホールや公民館機能が複合するマービーふれあいセンターの各所で、市民の目に触れる場所に常設展示されていた。

これらの作品は、発災時から約3週間後の7月27日に倉敷市立美術館学芸員、地元の修復家らによりレスキューされ、その際作品のさらなる損傷を防ぐため、和紙による表打ちなどの応急処置が施された状態で、同年11月に文化財総合研究センターに持ち込まれた。

いずれも作品全体が水没による被害を受けているが、本稿では特に損傷の激しかった2点を水害作品の修復事例として報告する。

2. 現場調査

西日本豪雨災害から約1年後の2019年6月、この3作品の設置場所や当時の状況などを確認するため3施設を訪問した。被災地は、精神的なダメージも大きいであろうし、復旧のための様々な業務で繁忙を強いられる。現地調査入りは落ち着きを取り戻すまで期間をおき1年後としたのだが、浸水被害を受けた住居は、壁が取り払われ屋根と柱のみの、未だ修繕の手が入らないままの状態が目立つ。復興のトラックが出入りし、そこら中から土煙が舞っている状況であった。

市民の生活を支える責務のある役所はすでに改修され機能も復旧していたが、越水決壊箇所に近く、流入した水位の高かったエリアにあるマービーふれあいセンターは、内部の備品などは撤去されているものの、館内はいたる所一面黒カビが繁殖し、天井からは電気コードなどがぶら下がり、不衛生で危険な状態のため職員も出入りが禁止されていた。発災時、近隣の住人が避難するため割ったという

¹⁾ 山陽新聞 HP「西日本豪雨特集 データで見る被害状況」参照

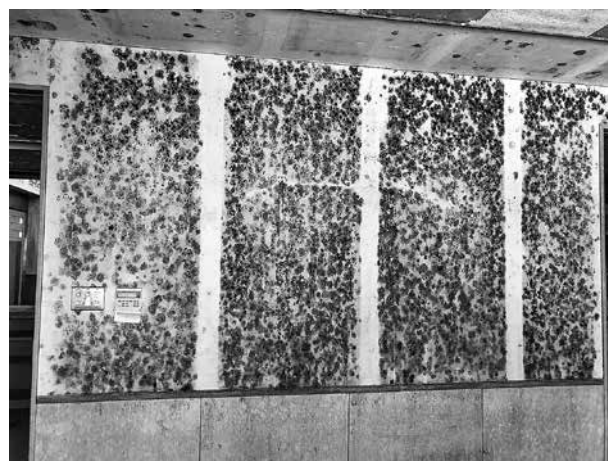
²⁾ 岡山県の代表的画家。明治29(1896)年、岡山県井原市(旧小田郡美山村)生まれ。東京美術学校(現東京芸術大学)で藤島武二、満谷国四郎らに師事し、戦後は日展、光風会展の重鎮として岡山画壇の発展に尽力。昭和39(1964)年没。

2階のガラス窓がまだその状態で残されていた。隣接する真備図書館も同様に出入りが禁止されていたが、調査のため特別に中に入る許可をいただいた。両施設とも当時の惨状が現状保管されているような現場であった。市民のくらしの回復が第一であり、復旧は教育、医療、福祉施設などが優先される。文化施設の改修の目処はたっていなかった。

著者の一人は、1998年の高知豪雨による美術館被害を当時職員として体験しているが、半年を待たずに再開できたことを顧みると、手がつけられていないこれらの施設の現状から、この度の豪雨の甚大さ、とりわけ真備地区の受けた被害がいかに激しく広範囲だったかということを感じた。



マービーふれあいセンター内部 (2019年6月)



作品がかけられていた壁 (2019年6月)



真備図書館内部 作品がかけられていた壁
(2019年6月)



真備図書館被災時開架室 (2018年7月13日)
*倉敷市立真備図書館提供

3.1 修復事例 1

【作品情報】

作 者： 片岡銀蔵
題 名： 備中神楽荒神舞
制作年： 1960 年
作品サイズ： 116.0 × 91.0 cm
支持体： キャンバス
技 法： 油彩
額 ： 有
額サイズ： 140.0 × 114.0 × 6.0cm
ガラス： なし（受け入れ時）
裏保護： なし（受け入れ時）
ご所蔵者： 倉敷市 真備支所

【状態】

本作品は、3階建ての倉敷市真備支所の1階から2階に上がる階段の中段踊り場壁面に常設されていた。発災時は2階に上がる階段1段を残して水が上がってきていたため、作品全体が水没していたが、翌日7月8日には水位が下がっており、丸一日水没した状態ではなかったと思われる。7月20日に支所職員が確認した際、作品は向かって右側のフックが外れ裏返り、作品の左側1カ所で不安定にぶら下がっている状態だった。職員が作品を壁から外し、横にした状態で別室に立てかけ保管。7月27日のレスキューで、楮紙による表打ちなどの応急処置が施されている。

作品全体において亀裂、剥離、剥落が激しく、画面左上部の剥落が著しい。かろうじて画面に残っている絵具層もキャンバスの膨張収縮の変動により、カール状に反っている。落下した剥落片は、部



真備支所被災前 *倉敷市真備支所提供



被災状況（2018年7月20日）
*倉敷市真備支所提供

分的に剥離した絵具層とキャンバスの隙間に複雑に入り込んでいる。それらは支持体から剥離しており、どの箇所から落下したかは不明。キャンバスは収縮し、木枠に反りが見られる。

大量の剥落片は、レスキュー時に色・大きさによりわけられ、ビニール袋で保管されていた。



(左) 仮置き保管状況 (2018年7月20日) *倉敷市真備支所提供

(右) 額から取り出された作品 (2018年7月27日) *倉敷市真備支所提供

【修復工程】

[作品]

表打ちの紙を温水と綿棒により除去したのち、キャンバス上で別の箇所から剥落、移動した剥落片を画面から取り除く。絵具層の下に重なるように入り込んでいるものもあるが、画面上に残っている絵具層もキャンバスから浮いてしまっているため、これらが動かないよう応急処置として、膠で仮固定しながら、剥落片の改修を行なった。

画面上の剥落片を除去した後、絵具層が動くことを防ぐため、固定が不安定な箇所は部分的にBEVA³⁾ (修復用合成樹脂) を塗布したのちキャンバスを木枠から外し、ブラシなどにより裏面の乾式クリーニングを行い、土、乾燥した植物片などを除去した。

レスキュー時に回収されていた剥落片及び、作業時に除去したそれらの箇所同定を行った。剥落片はU字状にカールしているため、形状を確認し、剥落箇所を同定することはかなり困難な作業となった。

絵具層をキャンバスに接着させ剥落を防ぐため、BEVA を画面全体に塗布し、ホットプレスで浸透

³⁾ BEVA371 をトルエンとミネラルスピリットで希釈

圧着させた。その際カールし硬化した絵具層の破損を防ぐため、温める時間を長く保ち絵具を柔らかい状態にしたのち、減圧プレスした。画面表から塗布したBEVAの浸透がホットプレス後も不十分な箇所には、注射器などを使って絵具層とキャンバスの間にBEVAを注入し、裏面からもBEVAを塗布し、再度ホットプレスを行なった。



ホットプレス



注射器によるBEVAの注入



アクリル系絵具による補彩

キャンバスを強化し絵具層の剥離剥落を予防するために、新しいキャンバス地により全面裏打ちを行った。裏面には作家による記載があったため、写真に記録した。

新調した木枠にキャンバスを貼り直したのち、画面表面に残ったBEVAをミネラルスピリット（石油系溶剤）で除去した。

剥落箇所に充填（充填剤：兎皮膠＋ボローニャ石膏）、成形したのち、アクリル絵具により補彩した。なお、充填・補彩についてはご所蔵者と協議し、背景には施さず、「舞手」（人物）の暗色部のみとした。

最後に画面全体に保護ニス（ニス）を噴霧塗布した。

3.2 修復事例 2

【作品情報】

作 者：片岡銀蔵

題 名：裸婦

制作年：1954（昭和 29）年

作品サイズ：90.0 × 130.5cm

支持体：キャンバス

技 法：油彩

額 ：有

額サイズ：117.0 × 158.0 × 6.0cm

ガラス：なし（受け入れ時）

裏保護：なし（受け入れ時）

付属品：展示用フック

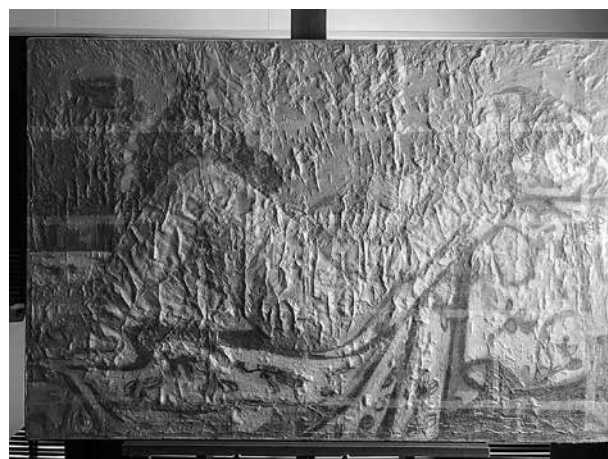
ご所蔵者：倉敷市 倉敷市立真備図書館

【状態】

作品は真備図書館 1 階の開架室壁面に常設されており、発災時は 2 階まで水が上がっていたことから、作品は全没していたと考えられる。事例 1 と同様に、翌日 7 月 8 日には水位が下がっており、丸一日水没した状態ではなかったと思われる。その後も壁面にかけてられた状態のままであったが、開架室全体にうず高く積み重なった大量の被災書籍などが撤去されたのち、7 月 27 日のレスキューで、楮紙による表打ちなどの応急処置が施されている。

作品全体に細かい亀裂、剥離、剥落箇所が多数あり、人物太腿部分の剥落が激しい。キャンバスは収縮し、木枠に反りが見られる。全体に泥が固着し、特に足首部分に著しい汚れがみられる。

大量の剥落片は、レスキュー時に色・大きさによりわけられ、ビニール袋で保管されていた。

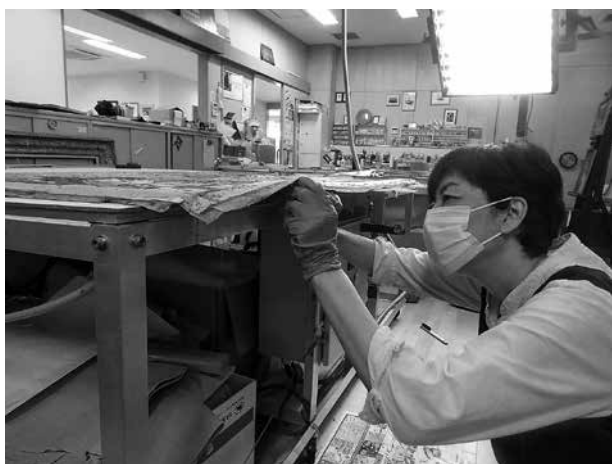


（左）真備図書館被災後の開架室 左上部に被災作品が見える（2018.7.13）*倉敷市立真備図書館提供
（右）保護紙貼付状態での斜光写真（搬入時状態）

■修復処置

[作品]

表打ちの紙を温水と綿棒により除去。表面が動くことを防ぐため、絵具層が不安定な箇所は部分的にBEVAを塗布して簡易固定したのち、キャンバスを木枠から外した。表面は絵具層が不安定なためクリーニング作業は行わず、裏面のみブラシなどによる乾式クリーニングを行い、固着した泥を除去した。その後、絵具層をキャンバスに接着させ剥落を防ぐため、BEVAを画面全体に塗布し、ホットプレスで浸透圧着させた。



キャンバス裏面のクリーニング



裏面に固着していた泥

画面表面に残ったBEVAをミネラルスピリットで除去するが、固着が不十分な箇所があるため、再度BEVAを表裏面から塗布し、ホットプレスで浸透圧着させた。BEVAをミネラルスピリットで除去し、絵具層の安定を確認した後、表面に固着している泥を温水及びメスなどで除去した。

レスキュー時に回収されていた剥落片及び、作業時に除去した剥落片の箇所同定を行った。また、キャンバスの収縮により画面上で重なりずれたまま固定されてしまった絵具層は、可能な箇所のみ修正を施した。

キャンバスの補強のため、四辺に新しいキャンバス地を接着した（ストリップライニング）のち、新調した木枠にキャンバスを張り直した。引き続き、剥落片の同定及び絵具層のズレの修正や付着物をメスで除去するなどの作業を行い画面を整えた。

その後、欠損箇所に充填（充填剤：兎皮膠＋ポローニャ石膏）、成形したのち、水彩絵具により補彩した。最後に画面全体に保護ニスを噴霧塗布した。

4. 共通する症状と作業及び課題について

河川からの浸水による泥を含んだ水に長時間浸かったため、どちらの作品も、下記のような症状を呈していた。

1. 絵画表裏面に、泥水による激しい汚れが付着した。
2. キャンバスが縮んだことにより木枠と額縁が歪んだ。
3. 絵具層に激しい亀裂が生じた。
4. キャンバス地、絵画面にカビが発生した。
5. 絵具層に剥離が生じた。
6. 絵具層が剥落して欠損が生じた。

今回の水害でどちらの作品にも確認された重篤な症状は、絵具層全面の剥離・剥落である。この原因は大量の水を吸ったキャンバス地（麻布）が縮んでしまったために、行き場を失った絵具層がキャンバス地から遊離してしまったためである。本来のサイズに戻すため、少しずつキャンバスを引き延ばす方法もあるが、その際弱った絵具層がキャンバスから剥離する恐れがある。そのリスクを避けるため、引き延ばしは行わず、キャンバスへの絵具層の固定を最優先に作業を進めることとした。

このように激しく剥離・剥落を起こしてしまった作品を修復するために、文化財総合研究センターが所有するドイツ製の真空ホットテーブルの使用は非常に有力な手段であった。この装置は1970年代にドイツで開発された機器をさらに改良したものであり、テーブルの表面はアルミ合金が使用されていて、温度を68℃に設定し加熱することによって、絵画表面に塗布された熱可塑性のBEVAを溶かし、さらに絵画全体を覆ったラップフィルムの間にある空気を吸引し、真空にすることによってプレスし、接着剤を浸透させ、絵具のテクスチャーを残しながら作品全体をフラットにすることができた。

本来汚れを除去した後ホットプレスを行うのが通常の工程であるが、この2点の作品は、遊離した絵具層がかろうじてキャンバスに乗っている状態で、非常に不安定だったため、事前のクリーニング作業をおこなうことは困難だった。クリーニング前にホットプレスすることにより、画面が安定したことでその後の作業を行うことができた。だが、泥を除去するために表面のBEVAを一度全て取り除くため、絵具層亀裂部分の接着剤を必要以上に除去せざるを得ず、そのため絵具層のキャンバスへの固着が不安定になり、再度ホットプレスの処置が必要となった。

この他、キャンバスが縮んだことにより絵具層がズレたままのプレスとなったため、BEVAを除去しながらズレを元の位置に戻し、再度部分的に電気ゴテで接着するなどの対応となった。加えて、絵具層が支持体から剥離しているため、表面からの塗布ではBEVAがキャンバスまで浸透しなかったため、裏面からも塗布しホットプレスを行なうなど、絵具層がキャンバスに安定的に接着するまで、作品にとっては負担の大きい処置を施さねばならなかった。

また、キャンバスが縮んだことにより、剥離した絵具層がカールしたため、剥落箇所と剥落片の同定が難しく、回収された剥落片を全て元に戻すことができなかつたことは悔やまれる。

欠損部の補彩については、所蔵者と協議し進めていった。「人物部分は鑑賞に耐えうるように補彩するが、作品が被災の歴史を語る存在ともなるだろう」ということで、背景はあえて補彩しない方向となっ

た。しかしその後、いわゆる震災遺産について様々な意見を聞く中で、「絵画の悲惨な姿を今後も見るのはつらい」、「自分たちは災害のことを忘れない」、という声も聞かれ、本2作品については、「きれいに整えることで復興の精神的後押しにしよう」という方向性となり、全体を整え仕上げることとなった。

ただし、《備中神楽荒神舞》の、完全に剥落してもとの図柄が確認できない部分については、欠損のままとした。

5. おわりに

今回の修復はイレギュラーの連続であった。一作業ごとに状況は変わり、その度に作業方針の再検討を重ね、ベストではないがベターな方向を探り完了に至った。今後も各地でこういった自然災害による美術品被害は避けられないだろう。この報告が、一つのケースとして、水による被害を受けた作品修復の参考となれば幸いである。

最後になりましたが、大変な状況の中、現地調査にご協力いただきました倉敷市真備支所、マービーふれあいセンター、倉敷市立真備図書館関係者の方々にこの場を借りまして感謝申し上げます。

本稿の余白に

すべての作品の修復が完了するまでには2年以上の期間を要し、ようやく再び真備地区、地域住民の元にお返しすることができた。しかし、現地では未だ再開していない施設もある。

2019年に現地調査した際、まだ大量の美術品（油彩画、書、屏風、軸など）が、修復、応急処置を受けないまま保管されていることがわかった。一部文書類などは、専門家の指示のもと地元のボランティアの方々により、処置作業が進められていたが、美術品については、これらをどう対処すべきか検討する時間もなく、また予算の目処も立たない状況であった。

災害時、被災作品や歴史的資料は、官民含めたネットワークにより専門家や関係者にその救出や処置が依頼されるという流れは構築されつつあるが、どこでどのような被災作品があるかをいかに拾い出すかが今後の課題の一つである。

大原秀行 吉備国際大学副学長、文化財総合研究センター長

影山千夏 文化財総合研究センター準研究員



保護紙貼付状態での斜光写真（搬入時状態）



修復終了、額装



1回目ホットプレス後の状態



修復終了、額装

